

# 伊藤先生の思い出

澤井 直\*

Memories of Prof. Kazuyuki Ito

Tadashi SAWAI

私が伊藤和行先生に始めてお会いしたのは、先生が京大文学部に着任された1995年、私が2回生のときに開講されていた演習講義だった。専攻分属前で、科学哲学科学史の専修に興味がありつつもどんな分野なのかよく分かっていないときに、2回生でも選択できる専門科目だったので受講した。当時、先生が初期近代の医学史の研究に取り組みれていたことを反映していたと思われるが、ホール『生命と物質』とフーコー『臨床医学の誕生』が題材だった。毎回一人の担当受講生が一章ずつ内容を紹介し議論するというスタイルの演習で、私の手書きの拙いレジュメや明瞭でない説明にも、伊藤先生はいろいろと補足してくださり、科学史の分野と先生の人柄に惹かれていった。結局、専攻分属では科学哲学科学史専修を第1希望で出したが、同じ学年で第1希望から第3希望まで含めて「科学哲学科学史」と記入したのは私だけだった。

3回生以降は科学哲学科学史専修で開講されている講義・演習に出席するようになり、伊藤先生にお会いする機会も増えた。科学革命期の科学へ関心があったことから、いずれ原典を読めるようにとラテン語を伊藤先生に教わるようにもなった。文学部博物館にあった先生の研究室で教わることもあったが、たいていは結婚前の先生のご自宅に伺って教わっていた。私が訳を作って、先生に確認していただくという形で、毎回かなりの時間お邪魔していた。

先生からのラテン語の指導では一言一句疎かにしないことを意識させられた。なんとなく意味がつかめているように見せるのを先生は好まず、名詞・形容詞の性・数・格や動詞の人称・数・時制など一つ一つの単語を文法的に把握したうえで意味を取るように教わった。卒論ではウィリアム・ハーヴィの発生論を扱ったが、ハーヴィの著である『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』も読んでおいた方がよいと助言していただき、1年ほどかけて最初から最後まで読み通すのに付き合っていた。いろいろな動物の心臓の絵を探してきて、それを見ながらテキストに

---

\* 順天堂大学医学部医史学研究室

書かれていることを読み解こうと先生と一緒に苦吟した経験が出发点となり、現在もラテン語やギリシア語の解剖関連文献を読み続けている。

もう一つ先生から教わる以外には身につけることができなかつたと思われるのは文献の探し方である。まだ Amazon もなく、始まったばかりの大学生協の洋書購入サービスでも見つからない文献が多かつた。文学部の図書館も科学史の基本的文献を充実している途中、国内の各大学の蔵書情報の電子化途中で、洋書の研究書の入手にはいろいろな方面からアプローチしなければいけなかつた。伊藤先生に文献検索・入手に使われている手段を教えていただき、卒論や修論に必要な文献の大半を集めることができた。しかし、どうしても手に入らないものもあつた。ハーヴィ研究の基本文献の一冊は新収洋書総合目録を遡っても国内の大学で収蔵している情報がなく、海外の古書目録でも見つからず途方に暮れていたが、そのことを先生に話すとすぐに研究室の書棚からコピーを探し出して、「これは順天堂の医史学研究室でコピーしたものだけど、使わないからあげるよ」と渡してくださった。フラカストロやマルピーギの論文を発表されたあと先生の研究の関心が医学史から離れていたため、他にも学生の身では高く購入できない医学史関連の文献を多数いただき、今も手元で参考にしている。

科学哲学科学史の修士・博士課程ではなかなか論文が書けず、先生をやきもきさせたと思うが、先生に誘っていただいた力学史の研究会は大きな刺激となつた。デカルトやオイラーのラテン語、フランス語、ドイツ語の原典を訳して読み解いていたが、文中に使われている式についてもすべて理解しようとする研究会だつた。私以外は理系の出身者が揃う中、高校時代から文系だつた私には難しく、力学や解析の教科書を読みながらなんとかついていった。

自分の研究では相変わらず初期近代の発生学や解剖学の書籍を扱っていたが、先生の研究会で行なわれていた現代的な力学の理解を踏まえての原典読解が自分の研究できているのか、と不安に感じるようになった。私の関心は初期近代の発生学・解剖学の理論・知識の変遷を追うことだったが、研究対象の書籍が伝えようとしている内容を理解できているのかと自問したときに、否と自答せざるをえず、先生と比較して自分の研究に関して劣等感のようなものを抱くようになった。

博論を出さずに文学研究科の博士課程を終えたあと、私は順天堂大学の大学院医学研究科で解剖学を学ぶことにした。解剖学講座には大学院生として2年、教員として10年在籍した。文系学部出身でありながら医学部生の解剖実習で解剖を教えたのは私以外には存在しないと思う。しかし、そのような稀有な存在になりたかつたのではなく、ただ、先生のように現代の解剖学の知識を踏まえたうえで過去の解剖学書を読み

解けるようになりたかった。

自分が現代の解剖学の知識を身につけることができたと感じたのは教員になって数年経ったときだった。実習で解剖するご遺体には教科書に記載される構造とは異なる変異が見つかることがある。しかし、変異はすぐに見つかるものでもなく、簡単に理解できるものでもなかった。実習中のご遺体の筋肉に本来よりも過剰になっている部分があることに気がついたとき、自分が教科書に記される構造とそれから外れている構造の両方を理解していることを初めて自覚できた。

医学部の授業の参考書として使われる解剖学書を翻訳する機会もあり、そこでは人体の構造について記述する際に内容を理解できているかどうかで言葉の選択が変わることに気がついた。動脈と静脈の多くは並んで走行していて、どちらも中心から末梢に向かって枝分かれしているような形状となっている。動脈について記述する場合は「枝分かれする」で問題ないが、静脈の場合は血流を考慮して「枝分かれする」は用いず、「(末梢から中心側へ)導く」「(末梢側の静脈を)受ける」などの表現を用いる。ほかにも同様の避けるべき表現が多数あり、書籍に現れている記述の背後には採用されなかった表現や取捨選択の過程が隠れていることを実感した。このことは自分の研究対象である古い時代の解剖書にも当てはまった。解剖書内の構造に関する記述で使われる表現に著者の知見や理解を窺い知れる場合があり、先生に教わったように一言一句疎かにしないことで、ようやく把握できるようなものだった。そういったものによってようやく気づけるようになった。

今、私はただ一人の常勤教員として順天堂大学医学部の医史学研究室に所属している。この研究室に移ってから、伊藤先生と研究室との間につながりがあることを知るようになった。研究室には日本医史学会の事務局があり、学会事務関連の人の出入りも多い。長年学会を支えてきた方から、伊藤先生が90年代初めに研究室によく出入りされていて、学会の名簿や帳簿を電子化し、その後のメンテナンスがしやすいように調整されていたことを教えていただいた。研究室の書庫には先生からコピーをいただいた本の元々の書籍が収蔵されている。その書籍を眺めると、ラテン語を見ていただき、文献入手のことや進路のことを先生に相談していた学生時代のことを思い出す。

京都から東京に移ってからは先生と直接お会いする機会は少なく、たまに私が京都に行ったときに先生の部屋に伺うか、先生が学会で東京に来られたときの学会場でお会いするだけだった。あるとき先生から近くで用があるので医史学研究室を訪ねたいとメールをいただき、先生がかつてよく出入りされていた研究室で先生をお迎える

ことができることを喜んだ。くずし字の読みの苦勞を共有したり、幕末から明治期の順天堂出身の医師で、先生の地元の北海道で活躍した関寛斎の研究をしたいというお話を伺ったりと楽しい時間だった。それが先生にお目にかかる最後の機会になるとは微塵も思っていなかった。

先生がいなければ私は研究者になっていなかっただろうし、医学部で教員になることもなかっただろう。だが非才の私には先生から何かを受け継いだとか、継承して次世代に残すとか言うことはできない。一学生として先生から教えを受けた思い出をここに記す。